

## 算数

➔ 1年生 | 「いくつといくつ」

ドットカードの形を作る活動を通して、  
数を合成する

## 1. ドットカードを使おう

算数セットの中の「ドットカード」は、おはじきと違って並び方が固定されている。自由度はないが、以下のようなよさもあるので授業で活用したい。

- ① 数を量としてとらえることができる。1年生のこの時期には数を量としてとらえる機会を増やすことが大切である。
- ② 5個ずつ2列にドットが並んでいるので、数を「5といくつ」という見方がしやすくなる。10までの数を見て、「5のかたまりといくつ分」という見方ができるようになることは、数を処理していく上で大切な見方になる。
- ③ 10の補数が見えやすい。比べる対象となるドットがすぐ隣にあるため、「10になるには、8とあと2」という見方がしやすくなる。

今回はこのドットカードを使って、数の合成・分解の見方を深めさせたいと考えた。

## 2. 10のドットカードの形を作る

0から9までのドットカードを提示した後に、10のカードだけを取り出し、「この10のカードと同じ形を、他のカードで作れないかなあ？」と聞いた。

ドットカードは、形を同じにすれば数が同じであることがわかる。そのため、たし算をしなくても、カードを重ねるだけで10になるかを確認められるよさがある。2枚のドットカードを組み合わせると重ね、10のカードの形を作っていた。

10を作って黒板に貼っていくと、カードが縦向きだったり、横向きだったりす



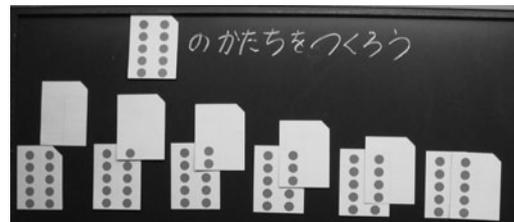
る。「縦でも横でもいいの？」と子どもに聞くと、「ほら、こうすれば同じでしょ」「反対にしたって、同じだよ」とカードを重ねたまま向きを変えていった。『数は向きを変えて合わせても、大きさは変わらない』という数の保存性を理解させるためにも、この活動は押えておきたい。このことが、 $4+6=6+4$ などの交換法則の理解にもつながっていく。

## 3. 2枚のカードの数を言葉で表す

1と9の重なったカードを指して、「これ10だよ。でもこっちの10とは違うところがあるねえ」と聞く。すると「1と9で10」「9と1で10」という言い方が出てくる。形は同じだが、2枚使ったことを言葉で表現させていくことで、「いくつといくつ」という表現方法を子どもたちから引き出せる。そしてこれが、たし算の式化につながっていく。

## 4. カードを並び替えると、きまりが見えてくる

「1と9」「2と8」「3と7」「4と6」「5と5」の順で並べる。「0と10」も子どもから出たら扱うとよい。



「だんだんはみだしてくる！」という子どもの言葉は、カードが順に並んでいることをはみ出したカードの位置で表している。数字が1ずつ増えたり、減ったりしているのも見つけていける。

カードを、視点をもって並び替えることで、きまりがより見えるようになっていく。整理していくことのよさを味わわせたい。